

# しんぱくの話

小川未明

青空文庫



高い山の、鳥しかゆかないような嶮しいがけに、一本のしんぱくがはえていました。その木は、そこで幾十年となく月日を過ごしたのであります。

人間のまれにしかゆかない山とはいいながら、その長い間には、幾多の変化がありました。人の足の踏み入るところ、また手のとどくところ木は切られたり、また持ち去られたりしたのであります。そして、それは人間ばかりとかぎつていなかったのであります。

あるときは、雨がつついて、出水のために、あるときは、すさまじいあらしのために、また真に怖ろしい雪のために、その脅威は一つではなかつたのです。

おなじ生命を有している人間のすることにくらべて、はかり知れない、暴力の所有者である自然のほうは、どれほど怖ろしいかしれないと木は思っていました。しかし、こうした嶮岨な場所に生じたために、しんぱくは、無事に今日まで日を送ることができたのであります。けれど、それは、また偶然であるといわなければなりません。

なぜなら、たとえ、人間の力では、そこへは達しなかつたけれど、自然の力は、いつも自由であつたからです。現に、数年前のこと、ちようど春先であつたが、轟然として、なだれがしたときに、幹の半分はさかれて、雪といつしよに谷底へ落ちてしまつたのでした。幸いに根のかみついていた岩角が砕

けなかつたから、よかつたものの、もし壊れたら、おそらくそれが最後だつたでありましょう。

しかし、いまは、そのときの傷痕も古びてしまつて、幹には、雅致が加わり、細かにしげつた緑色の葉は、ますます金色を帯び、朝夕、霧にぬれて、疾風に身を揺すりながら、騎士のように朗らかに見られたのであります。

冬でも、この岩穴の中に越年する、いわつばめがすんでいました。ひらひらと、青い空をかすめて、右に、左に、飛んでいたが、やがて、風に舞つて落ちてきた木の葉のように、しんぱくの枝にきて止まりました。

「雪が近づきましたよ。西の空が火のように赤いのです。こんど

あらしがあるときつと雪ゆきを持つてきますからね。」

そういつて、いわつばめは、だんだん黄昏たそがれていく、奥深おくぶかい空そらを見上みあげていました。

うっかりしようものなら、冷つめたい風かぜが、小ちいさな体からだをさらつて、もう暗くらくなつた谷間たにまへたたき落おとそうとしたのであります。

しんぱくは、そのたびに、頭あたまをはげしく振ふりました。

「いや、そのほうがいいでしょう。あなたたちは、岩穴いわあなの中なかでゆつくり眠ねむりなさるがいい。かれこれするうちに、じきに四、五月がつごろとなります。あの水すい晶しようのように明あかるい雪解ゆきどけの春はるの景け色しきはなんともいえませんからね。それまで、私わたしは、あらしや、吹ふ雪ぶきの唄うたでも楽たのしんできいています。そして、あなたたちが、岩いわあ

穴ななの中で、こうもりのおばあさんからきいた、不思議ふしぎのおとぎばなしを教おしえてくだされば、私わたしは、西風にしかぜのうたっていた北きたの国の唄うたをうたつてきかせますよ。」

「なんだか、来らい年ねんの春はるが楽たのしみですが、もう人間にんげんが、ここへやってくるようなことがなければいいが。」

いわつばめは、不吉ふきつな予感よかんがしたように、いきいきとした顔かおをくもらしました。

しんぱくは、またひとしきり、疾風しつぷうに顔かおを動うごかしながら、「このごろは、夜よるになると霜しもがおります。そして、星ほしの影かげは、魔ま物の目めのようにすぐ光ひかります。どんな人間にんげんでも、露宿ろしゆくすることはできません。あの、あおずんだ、真夜中まよなかの景色けしきを、あな

たに見せたいものです。」

だまつて、しんぱくの話はなしをきいていたいわつばめは、急きゆうに身みぶ

るいをしました。そして、あわてて岩いわ穴あなに帰かえつてゆきました。

真夜中まよなかごろ、木きは、頭あたまの上うへを、青い炎あおほのおの尾おをひいて流ながれる星ほしを

見みました。なんとなく、宇宙うちゆうに存ぞんざい在ざいするいつさいのものが、

運命うんめいに支配しはいされ、流転るてんすることを語かたるごとくに感かんじたのです。

あくる日ひのこと、すぐ近ちかくで、人にんげん間の声こえがしました。さるの

ごとく、岩角いわかどを伝つたわつて、綱つなを頼たよりに下おりてくる男おとこを見みました。

腰こしには、岩いわを砕くだき、根ねを切きる道具どうぐを結むすびつけていたので、しんぱ

くは、だれを目めあてにやつてくるのか、すぐに悟さとつたのでありま

した。

「ああ、いい木だ。長いことならんでいたのだが、まったく命が  
 けでなければ取れるところでない。」と、年をとった男は、独り  
 ごとをしました。

そして、そこで、幾十年生きてきたしんぱくを、岩角から切  
 りはなして、その根もとを掘り抜くとしつかり背負つて、綱をた  
 ぐつて上がつてゆきました。しんぱくは、かつて自然をおそれて、  
 人間にどれほどのことができものかと、考へていたことの、  
 たいへんなまちがひだったのを、この瞬間に悟つたのである  
 が、それから、自分はどうされたのであるか、先のことはわから  
 なかつたのです。

木が、やっと元気を快復して、はつきりと見、また聞くよう

になったのは、ある大きな盆栽師の庭園でありました。そして、自分は珍しい支那鉢に植えられて、一段高い、だんの上に載せられていたのです。

夜になると、風は吹いたけれど、あのむちを振り、ひづめを鳴らして過ぎるようなあらしではありませんでした。星の光は急に、遠くになって、また銀河の色は、見えるか見えぬほどのかすかさです。

「自分の生活は、変わってしまったのだ。あの岩から引き離されたときは、枯れると思つたのがこうして生きるばかりでなく、あのあらしから、吹雪から、もう、まったく安心なのだ。なんという人間は、神以上の力を持っていることだろう。」

しんぱくは、人間を偉いと思ひました。ここへくる人たちは、だれでも、この鉢植えの前に足をとめて、感心して、ながめました。

「いい、しんぱくですな。」

木は、みんなが、自分をほめてくれるのでうれしく思ひました。いわつばめや、こうもりなどに、愛されるよりは、人間にほめられるほうが、うれしいような気がしたのです。

「命がけで、自分を山からつれてきて、かわいがってくれるのだからな。」

こう、木は思ふと、また、いつか雲が、

「山に育つて、下界へいったものは、みんな死んでしまふ。だか

ら、霧と、あらしと、雪の中の暮らしを恨んではならない。なんといつても、それが貴くて、輝かしいのだから。」といったことが、愚かしく感じられました。

ある日、りっぱな紳士が令嬢をつれて、この庭園へはいつてきました。そして、やがて同じように、しんぱくの前に立つて、主人から話をきかされていました。

「それは、人間のちよつとゆけるような場所ではありません。高山の、しかも奥深い嶮岨ながけの岩角にはえて、はげしいあらしに吹かかれていた木です。このしみは、なだれに打たれた傷痕でございます。」

「一度そういう山へ、登ってみたいと思ひながら、私たちには、

そんな元気がない。せめてこの木でもながめて、あこがれた山へ  
 いったつもりでいきましょう。」

紳士は、高価な金を払って、しんぱくを車の中へ持ち込みまし  
 た。このとき、しんぱくは、命を賭けて取り、育ててくれたほど  
 の人が、金銭で売ってしまった、その愛について疑わずにはい  
 られなかったのです。しかし、これが人間社会の掟でもあ  
 ろうかと思つたのであります。

ついに、しんぱくは、岩頭のかわりに、紫檀の卓の上から垂  
 れたのでした。そして、星のかわりに、はなやかな電燈が照ら  
 したのでした。そして、周囲を舞うものは、あの可憐ないわつ  
 ばめでなくて、人間の美しい男女らでした。きくのはあらし

の唄うたでなく、ピアノの奏楽そうがくでした。この息詰いきづまる空気くうきの中で、木きは、刻々こくこくに自分じぶんの生命いのちの枯かれてゆくのを感かんじながら、「見みぬうちは、みんながあこがれるが、おとぎばなしの世界せかいはけっしてくるところでなく、ただ、きくだけのものだ。」と、しみじみさと悟とつたのでありました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1933（昭和8）年10月

※表題は底本では、「しんぱくの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# しんぱくの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>